

陳 述 書

大津地方裁判所 御中

1 わたしが暮らしていた浪江町

公共交通機関は通学通勤の最低限のバスのみでしたから、住民はおとなの数だけ車を保有していました。

冬はかなり寒く一番冷えた時は-19℃。冬タイヤは11月の最初に交換し5月の連休に替える生活でした。雪は12月の終わりから少しずつ降りその頃はさらさらしている雪も3月から4月まで重い雪が降り、梅が咲くと雪に覆われ、花は咲いても実りの少ないものでした。桜が雪に覆われることもありましたが、それだけに春は待たれるものでした。

その長い冬を助け合って暮らすのですから、目に染む煙は流れるけれど、人に暖かな、来る人を拒まないおらかな人々の暮らす町でした。考え方も開かれていて、女子供と馬鹿にされることはありませんでした。

わたしたちの地域の婦人会は、「そんな名前やめっぺ」と、福島県の婦人会に所属していても、「女性の会」と名前を変えていて、月に一度の女性の会に集まりは、バッチャンから嫁さんまでが集まり和気あいあいとしていました。

地域の行事は色々あって、担当ごとに春の祭り、秋の祭り。盆踊り。運動会と敬老会は隔年でした。その練習や準備は楽しいものでした。他に国道を掃除する会は福島県下で行われていますが、汚す人が居ないので、前の日に区長が空き缶を投げて置きそれを回収するという掃除で、子どもたちも朝早くから楽しんで参加し、みんなで朝食のおにぎりやパンを一緒に食べていました。

高校や学校の草刈りも子供が居なくても、学校は地域の宝として位置づけられ、皆が参加していました。盆踊りは地歌とお囃子は住民がするもので、歌手はその時の状況に合わせて歌を変えそれに合わせて踊ったり休んだり見物したりしたものです。夏の山登り、秋のキノコ狩り、助けあって、笑いあって、思い出すとなんてよい地域に暮らせていたのかと、喪った物の大きさに泣けてきます。

2 わたしの浪江町での生活

我が家は嘉永時代に建てられたという古い民家でした。今よりはるかに冬の厳しい、生きていくのが大変で子どもが大きくなるまで育つのが困難な時代にあって3世代4世代で馬を育て、養蚕をしていた家族でした。

厩、台所、囲炉裏のある居所以外の南側は春から秋まで養蚕で使われ、北側は老人の居室の1階、元気な家族の居室は大幅な箱階段を上って2階に。大きな神棚は2階からお参りするようになっていました。3階は養蚕の道具倉庫、4階は囲炉裏の煙抜けに作られている、典型的な東北の茅葺の大きな家でした。

台風の来なかった東北は1階と2階が同じ高さで作られていました。そのほかに、蔵、稲こき場、次男三男が独立するとき、土地を分け与えられ、其処を耕し、家を建てるまで、門の上に所帯を持つ通り門が合わさって1軒をなしていました。母屋は当時厩を除いて300.82㎡とありました。この地域にあって特別大きな家ではありませんでしたが、時代が変わり通り門が残っているのは数軒になっていました。夫はこの家で11人兄弟の末の子で、結婚するまで大きくなったのは7人でした。

兄が突然亡くなり、子どもたちが戻らないと決断したため家族会議で跡継ぎに指名され、わたしと息子が2007年から帰宅準備を始めました。その古い家は昭和13年ころの大地震であろうと言われましたが、家の中

央の根太が外れていることから、リノベーションしても今の建築基準では無理でした。厩と台所を解体し、母屋の冠婚葬祭のための食事を運ぶための1階廊下と縁側部分を取り外した198㎡の母屋の耐震施工をしてリノベーションしました。それまでわたしたちは通り門の2階で暮らしていました。

母屋が完成したのは原発事故の8か月前でした。地域の方々からは小さいころ遊んだ家を取り壊さないでくれてありがとうと、入れ替わり立ち寄ってはお礼を言ってくださいました。夫は月に1度帰宅しながら、大阪での出稼ぎ生活を頑張っていました。2013年に3月に早期退職をして帰って来る予定になっていました。通所デイケアをしたいと夢を持ち、地域の社協からも応援すると声をかけてもらっていました。

母屋が完成し、職場で保健所の人がもうすぐ殺処分されるという子犬の話をしてくれて、その犬と一緒に暮らしていました。本当にめんごい賢い子犬でした。

3 2011年3月11日午後2時46分

地震発生時は家には出勤前の息子がおり、ゆっくりとした、大きな横揺れで、それは長く続き、家の壁の中の断熱材が揺れ、土壁に亀裂が入っていき、犬を連れて100年を超えていた糸ヒバの木の下にいたそうです。

雷鳴と共に吹雪となり、少し収まったころ、家の中で倒壊してはと、犬をドッグランに入れて出勤したのですが、通勤路は崩れたり落石があったりで、かなりの時間を要したようでした。

わたしは大熊町の原発から4kmほどの福祉の職場に居ました。事務所で遊園地の大きな船の遊具に乗っているような揺れで始まりました。大きく横揺れしながらいつ止まるとも予測のつかない揺れでした。天井からエアコン本体が落ちてきて、かろうじてコードでぶら下がり、いつも平面なの

にあんな大きな本体だったのだとか、コードが切れたら火が出ないとか、切れて落ちてきたらとか地震の揺れで振り子のようにになっている幾つものエアコンを身動き取れず、若い子を下にかばって見ていたのを覚えています。カウンターの戸が飛んでいき、花瓶が飛んできて足の指に当たって割れましたが痛みを感じていませんでした。後日指が紫に腫れ上がってもその時のだと気が付かないほどでした。

一時揺れが収まってからデイケアに来ていた人々を外に誘導しましたが立っている足元が地割れしていき、やはり雷鳴と共に吹雪となり、余震の間に全員の上着を取りに行く状況でした。それぞれの職員が独居老人や昼間一人の老人の安否確認に出ましたが、停電で信号機が止まり道は渋滞でなかなかかどらない状況と、津波で避難所の公民館が持っていかれた、駅近くの陸橋が落ちて通行不能などの情報が、繋がらない携帯で情報が切れ切れに入りました。電話は不通になっていました。

町の避難計画からそれぞれの利用者の避難所へ誘導が終わり、役場へ確認に行っていた上司が戻ったのは5時近くで、わたしの自宅の津島が一番遠いことから直ぐ帰れ、明日から自宅待機を命ぜられました。その時には既に国は原発立地の町の避難を決めていたことは、避難して随分経ってから知りました。

4 職場から帰宅までの道中

朝通った通勤路は双葉町へ入ったところが路肩崩れで通行止めとなり、6号線も津波で通行止めと警察官に促され谷筋の288号線へと迂回。その間も余震は続き、あとから確認すると、この日東北地方で14時台から17時台までに震度5以上の地震が14回発生したと記憶しています。

走っている道が地割れし、対向車が落ち込んでいくのですが、自分がぶつからないように運転するのが精いっぱいでした。道には大きな石が落ち

ており、先に県が動かした後にも無数の岩に近い大きな石が防護策を押しつぶして落ちていました。揺れるたびに石が山から落ちてきて、かわすのに必死でした。

やっと葛尾村へ入ると中学校の土留めが道に崩れて通行できず、浪江へ帰るといふ工事の車に挟んでもらって、知らなかった峠道を超えました。まだ冬タイヤを履いていたおかげで雪の山道と地震で雪崩れたと思われる峠道を必死に轍を踏み外さないよう超えていくことが出来ました。

船引の峠道を超えると、葛尾村への道が稲妻のようにジグザグに数十センチ幅で地割れしており、工事の車両の人がヘッドランプで誘導してくれるのに従い、タイヤで地割れを挟み、左右にハンドルを切りながら村へと降りました。本当にその方々のおかげでした。困った時に、「俺も浪江だからついてきな」、「離れんでねえど」、「困ったときはお互い様だべ」と申し出て下さった町の方々の暖かさを思います。浪江の町へ戻る方々と別れ、津島へ向かう道は8時を過ぎて、山から地震で崩れだした道はすっかり板のように一面凍結していました。池のようなアイスバーンを下り親戚の安否を確認して帰宅したのは8時半を回っていました。それまで吠えたことのない犬がわたしの車の音で、真っ暗なドッグランの中で狂ったように吠えて飛び上がって喜んでいました。息子が職場の散乱状況を片付けて帰宅したのは夜中でした。

5 福島第一原発水素爆発後

爆発音が人の出す物音がなくなった町に響いた後でした。従妹とすぐ畑に出て畑の作物、白菜やほかの菜っ葉を畑から必死で取り入れました。白菜は畑にそのままでした。わたしたちの地域では白菜を少し遅く一部種蒔きし、雪の中でひしゃげさせ、それが春先に新たに芽生えてくる葉がそ

れは甘くて、春先の楽しみな食べ物でした。爆発音の後でしたから大丈夫と思っていました。

午後4時になっていたのかいなかったのか、人の顔がわかったのもう少し前なのかもしれません。夕方でした。わたしたちは爆発音を聞いていました。何かあったと思いました。でも原発から27km今は山瀬の風、阿武隈山系から海へ向かって風が吹く。大丈夫だと思っていました。

自宅前はすぐ114号線でたくさんの車が停まっております、公民館や保育所活性化センター、小中学校にも人が集まり始めていました。通り門の下に洗濯機を置いていたし、山水も潤沢に流れていました。それらを自由に使ってくださいと張り紙し、道にホースを出して、洗剤などを出していました。

その時ハイエースのような車が停まり、何かを叫んでいました。見たことのないマスクをしており、声が聞き取れませんでした。聞こえないと言っても彼らは窓を開けようとはしませんでした。

分からない、分からないというと、窓を開け、「なぜここにいるのだ」、「ここは危ない」、「頼む」、「逃げてくれ」、「30kmを超えて福島方面へ頼む、逃げてくれ」と、泣くような声でした。何が危ないのかと聞いても、ここは危ない、頼む、頼むといい、降りてきて、道を歩いている人に「車の中に入れ」と言いました。避難所があるというのと彼らは本当に驚いたように立ち止まり公民館のほうへ向かいました。警官や消防団が後から着た簡易の防護服とは全く違っていました。まるで映画のE.Tの中に出てくるようだと思いました。

そこから避難してきているわたしの友人家族、親戚家族、その友人家族。その友人のアパートの人など25人で相談しました。わたしたちは当分ここで暮らすのだと思っていて、気兼ねなくしてもらうために、みんなでルールを決めたばかりでした。今聞いたことを伝えました。様子を見よ

う、余震もひっきりなしで今逃げるのは夜の道は危険すぎるということになり、若い人たちが情報を集めに出ていきました。乳児も幼児もいました。チェルノブイリ事故の被害者の話を聞いていたので、子どもだけは逃がさなくてはと思いました。でも家主のわたしが言えば追い出すようでした。子どもを守りたいと必死でしたが老人たちは動きたくなかったのは当たり前です。若い人が戻り、避難のバスがたくさん出ていった、運転手は状況が分からないが福島方面へ向かうと言ったということでした。

あとからそれは避難所がいっぱいとなり次々来る人たちを福島市内の避難所へ送っていたのだと知りましたが、その時は次々とバスが入り出ていくことでやっぱり危ないのだとなりました。町へもこの情報を知らせましたが、どこの誰ともわからない情報に21000人を動かせないという返事は理解できませんでした。聞いても名乗らなかった人にもっとしつこく聞くべきだったと思いました、後の祭りでした。

仕事がなくなり、地元の消防団として炊き出しに出ていた息子が、流言飛語に感わせられるなど怒りました。でも、間違っていたら後で笑える、子供の被ばくは守ると、けんかしていました。

従妹が、わたしはこの息子が大事なんだ大好きなんだ、わたしがここに居たらあの子を逃がせない。だからより遠くへわたしが逃げていこうと言ってくれました。

すると、小さな子供を持つ夫婦に、一緒にその車で逃げてきた同じアパートの人が、あんたたちがわたしの車で子ども連れて逃げな、わたしは一人身だから、避難バスに乗る。生きていたら後で返してくれたらいい。お母さんがどこかの避難所にいっぺ、探して一緒に逃げな、子どもを守れと言ってくれたのです。こんな時に！こんな人が居る！と感動しました。浪江町の人を誇りに思っています。あの時、みんなでハグして別れました。

それから友人たちといとこたち以外に会えていません。

あの時、町は何も情報を与えられませんでした。原発事故が起こった時の取り決められていた法律は一切無視されました。有事にこそ情報は国民に等しく与えられるべきです。避難時の暴動など大きなお世話。情報があれば国民は判断できる。

少なくともわたしたちの町の住民は大変な避難の時も助け合って行動したのです。

6 浪江町の全町避難

14日深夜二本松市から、浪江町全町民21500人の避難の受け入れの返事をもらえ、6時半から炊き出しに出ていた息子はいち早く職員から全町避難を知らされていました。8時過ぎに賞味期限の切れかかったおにぎりを持たされて帰宅しました。10時に全町避難する。二本松の東和体育館で役場機能は東和体育館の直ぐ脇の二本松支所に間借りすると。お前はより遠く父の勤務地へにげろといわれたと。

いつかは避難になると思っていました、息子が自分だけ避難はしない、町が避難するまでは炊き出しの役割を果たす、と決めていたので一緒に出ると決めていました。皆を避難させた12日から息子だけは避難させたいと何回も話し合いの上そう決めていました。

2時間で人生全てに決着をつけるのは大変でした。家にある食べ物全て、冷蔵庫、別の冷凍庫も空けて外に出し、春からの種類もすべて出し、育てていた盆栽他植物を、せめて生き延びてと土に預けました。被ばくは分かっていたつもりですが、そうしなければ家を捨てられなかったのです。

いつも金曜日に燃料補給していた通勤に使っていた普通車は地震でスタンドが機能せず給油不可となり、燃費の良い軽自動車に、耕運機からガソリンを抜いて入れ、買えるものは残して行けと言われて、二度とうちの米は食べられなくなると、30kgの玄米を5袋積み、どうしても持っていき

いものひとつは、これから必要になるものは喪服だと思いました。

犬を連れて降り出した雨が雪に変わる頃、郡山のスクリーニング場所を目指しました。

7 郡山でのスクリーニング、上限を超える被ばく

郡山体育館は既にたくさんの人が並んでいました。駐車場を探す方、列に並ぶ方に別れました。みぞれが時折降っていました。3時間並んで順番が来ました。並んでいるうちに気分が悪くなってしゃがみ込む人、袋に嘔吐している人もいました。

順番が近づくと、津島一、と呼ぶ声が聞こえていました。津島の人が多いのかと見渡しても知り合いの姿はありませんでした。犬を測ってほしいと頼むと、人以外は測らないと断られました。毛が生えているから心配だと言っても取り合ってもらえませんでした。

掌、上着、髪の毛とサーベーターが動くと一緒に針はばたんと振り切れました。「あれ？」と係員は言い、「それ壊れていませんか？」とわたしも聞きました。「あれ？」と言いながらもう一度測っても同じで、何処から来たか問われて浪江町下津島からと答えると、係員は何処かに「また津島一！」と叫びました。

上着を脱ぐよう言われ、下に來ていた衣類は8のあたりで止まりました。ズボンも同じでした。靴の裏は測りませんでした。別の係員が分厚い大きな袋を持ってきて、上着をここに入れるように、1週間開けてはならないがそれ以降は洗濯すればよいからと袋に入った上着を渡しました。息子は上着も8のあたりで止まり、ズボンのすそがもっと高いように見えましたが、係員は「行ってヨシ！」と告げました。

事故時のマニュアルでは1万3千CPMを超えたものはすべし手順が決まっています。ましてや14日以降10万CPMに引き上げられていたので

す。直ちに除染がなされ、ホールボディカウンターを受けるはずが、守られませんでした。有事のためのマニュアルはこの原発事故で何一つ守られなかったのではないかと疑っています。

8 避難所での生活の実態

そのあと、大阪に避難したものの、あなたたちが逃げてくるから高速道路を伝って汚染が広がったのだと言われました。腐った蜜柑はわたしののだと思いました。そんな時津島の友人から、帰ってきてと電話が入りました。避難所を手伝ってと疲れ切った声でした。

必要としてくれる場所が、私の居場所だと思いました。汚染源は自分なのだ。それで泣いて止める娘を振り切って軽自動車でも福島へ戻りました。体育館は冷え込み持参した寝袋では冷えて眠れず、近くの商店街も開いていませんでした。支援物資をもらいに行くよう勧められていくと、小さなこたつ布団と、酷く汚れてボマード臭い敷布団が一枚だけ残っていました。気の毒だが遅れてきたから残っているのはこれだけと言われて小さなシャツももらえました。

皆悲惨な避難常態であるにもかかわらず、浪江の人らしく明るく、暖かでした。共同トイレは寒さ対策で二重ドアになっているので、出るとき誰かが来れば、開けて待ち、頑張っぺなと声かけあう暮らして、「ありがとう」と「頑張っぺ」の言葉はいつも周りにありました。ヒステリックになっているのは一部の男だけでした。

四月になって学校が始まると、子どものいる世帯が出ていきました。受け入れ学校の近くの避難所へと移動したのです。バスで出ていく家族を皆で見送りました。あんなめんごい子どもが一身に苦勞を背負ってよと一人が言い、バスに向かってみんなで負けるなよ～頑張っぺ～と叫んで手を振りました。出ていく大人も子供も泣きながら手を振っていました。子ども

たちが出て行ってから、支援物資の黄色い子供用の傘が届きました。傘もない人多く配られると、避難生活1年生だなど傘をさして笑う元気がまだこのころはありました。

9 旅館への一時避難

体育館も、地元の方々から地域生活に困る、年寄りのゲートボールも出来ないから出て行ってほしいと苦情が寄せられていると、町職員がまだ生き先は決まらないが、ここを出ていく準備をしておいてほしいと話がありました。先の見えない暮らしの中で、ゲートボールする日常がある人たちがいることの不思議と哀しさでした。

県と国は温泉の多い福島県で風評被害の対策も含めて、避難者を温泉旅館などへ分散収容することを決め、当該組合との話し合いが出来て、町も振り分けを始めました。機械的に避難者を世帯ごとに分けるものでした。

そのために様々な問題も出てきました。新聞は画期的な避難形態であるように書きましたが、避難者の先の見えない暮らしと不安や疲れ焦りが出始めた時期と重なり、広い家で仲良くすみ分けて暮らしていた大世帯が、小さな部屋ごとに区切られ、住民が地区関係なく振り分けられた、この旅館への避難が家族関係を壊していったとも思います。

10 プレハブの仮設での生活

わたしは単身避難であったため、別な体育館が振り当てられていました。行く与其処にはわたしの名前はありませんでした。混乱の中同じ苗字が多く間違っただようでしたが、行く先が無く、またとぼとぼと、大阪へと向かいました。

5月になっていました。少しすると仮設住宅の申し込みが始まりました。避難場所を大阪ではなく被ばくの不安はありましたが、地域の人たちと同

じ苦勞をすることを選んだわたしたちは、犬と一緒に暮らせる仮設で親戚も地域の人も多い桑折町の仮設へ6月から入居できました。

応急仮設住宅は阪神淡路大震災の時の法整備されたもので、関西の暮らしが基準で、東北の気候は全く考慮されていませんでした。鉄骨が室内にむき出しで夏は鉄骨が熱くなり、仕事から帰ると締め切った部屋が40度になっていることもありました。冬はその鉄骨が熱を奪い、冷えました。2年を借りて暮らす基準で作られているため、大雑把な建て方で、床はコンパネの上に薄いカーペットで風が吹きあがりました。めくると数センチの隙間がありそこから地面が見えていました。

11 ワンコのまっちゃんの死

事故当時飼ったワンコのまっちゃんは8か月の子犬でした。人を信頼し、全く無駄吠えしない穏やかな雌犬でした。家の周りにはかなり大型の猪が出没し、深夜枕元に鼻息が聞こえたりするほどで、保健所の方の話から保護犬をもらってきました。

審査を経て飼い主となれて獣医さんから、「こんなめんごい犬さ外で飼ったら可哀そうだ。猪はおかあさんさ追っ払って、夜は家の中で飼ってやりなさい」と言われて、夜と雨の日は家の中を自由に歩いていました。牧草地に急な天候変化や日差しを遮る小屋もあるドッグランを作ってもらい、昼間はそこで過ごし、勤めから帰ると一緒に家に入る生活でした。

事故後、家の周りに避難の人々や車が増え、人好きなまっちゃんは家の中に入れても隙を見つけては、人懐こく走っていき誰かが連れ戻す暮らしでした。裸足で地面に居て、毛皮で、付いたものをなめたらと避難してきた人に逃げてもらってからは、家の中でも繋いでいました。

仮設の生活では二段ベットを狭い部屋に作り下をまっちゃんの居場所にして上の段で息子が寝る暮らしでした。一部屋だけがエアコンがあり、毎

日部屋にいるまっちゃんのために、そこがまっちゃんと息子の部屋になりました。建付けの悪い隙間だらけの仮設にシリコンで目張りをし、その部屋だけはエアコンが効く様になりました。なるべく室内から出ないようにしていましたが、朝夕の散歩では外に出る必要があり、大阪に置けたら安心でしたが、マンション暮らしの夫には預けられませんでした。

2011年12月の終わりころになるとどことなく元気がなくなり、散歩も喜んで走り回らないのが気になっていました。でも食欲はありました。正月に大阪へ出た折に獣医さんへ受診しましたが、特に異常は無いと言われ、来るまでの長旅で疲れたのだらうとの見立てでした。

1月6日頃から軽い咳をするようになり、7日の朝咳をしていたかと思うと雪の上に鮮血が飛び散りました。知り合いに獣医さんを紹介してもらい福島市の南まで連れていきました。何のウィルスにも感染しておらず、臓器中から出血していると言われました。涙も黒く固まって毛についていました。急性の血小板減少症で血を作ることが出来なくなっていると、入院することになりました。朝夕面会に行きましたが薬の効き目は出てこず、この薬で効かなかったら家で最期をと言われていました。

10日の夕方連れて帰ってとせがむまっちゃんに今薬が新しくなっているから、きっと治るからと言いかせると、くーんと鳴いてゲージの奥へ行って丸まり、二度と出てきませんでした。11日の朝も怒ったように丸まったまま、顔を見せようとはしませんでした。そして、3時頃危篤と連絡が入り、仕事は4時まででした。外回りの相方が直帰したことにしてやっからと、病院まで送ってくれました。その時には機械的に心臓が動かされている状態で、既に目は死んでいました。

人の事も被ばくについて良く分かっていない、まして小型の生き物については何のデータもないのだと言われました。言ってみるなら、この状況は広島の入市被ばくとよく似た症状だと言われました。

後で、犬の一日はヒトの7倍の長さだと教えられました。たった一晩と思ったのに、あの子は1週間も知らない人の間で蹲っていたのだと思うと、我儘など言ったことのないまっちゃんが、あれほど鳴いて連れて帰ってとせがんだ時に、なぜ連れて帰らなかったのかと自分を責めました。まだ立ち入れた浪江の自宅へ連れて帰り、重機で汚染されていない深い穴を掘り桜の根元に埋葬しました。

あれから燕は人が居なくなり巣を作る土が無くなって、津島から消えました。蛇も見なくなりました。地面をはいずって生きているのですから当たり前でしょう。いつも家のどこかに巣を作っていた日本蜜蜂も見なくなりました。動物はヒトの起こした原発事故で、様々な命を縮めたのだと思います。

まっちゃんもその中の一匹であったのでしょうか。ペット棟のあるわたしたちの仮設で一番若いまっちゃんが死んで次々と犬は死んでいきました。因果関係は分かりません。でも、事故さえなければ生きられる命だったと思います。

1.2 兵庫県に避難するまで

2011年6月から仮設で暮らし、仮設の中で急激に生活が変わった高齢者が要支援にならないよう何かしなければと手作業をして売って励みのある作業所を思い立ちました。町は急激に増えた要支援や要介護者のケアで手一杯でした。仮設は、販売する作業所に仮設の空き部屋は使わせてもらえないことになっています。自治会にかけあい、多額の収入ではない、励みになるほどのささやかな売り上げであること、売れることが日々の励みになると訴え、町にも訴えてもらい集会所の1室を作業場として借りることが出来ました。他にも吊るし雛のサークルが立ち上がり、やはり販売を目標にしました。

作業所立ち上げを仮設の自治会報で募集し 11 名の老人が参加の申し出がありました。刺し子を選んだのは、福祉施設の作業の中で担当してきており、これなら支援できたからです。

「浪江花布巾」という名前で刺し子の布巾を作り販売しました。晒は大阪の友人が問屋の端切れを段ボールで届けてくれ、福島ではなかなか手に入らなかった様々な色の刺し子糸を古い友人が、確かに届く支援だと送ってくれました。販売の機会は各地の生協や口伝えで広げてもらいました。図案も古典柄は糸運びが初心者には難しく、独自の図案を考え、刺し子が苦手な人は図案の布への転写を、ミシンならできるという人には布巾縫いをしてもらい、仕上げのアイロンかけとセットになりました。この方は作業の中でアルツハイマー初期を発見することが出来ました。

みんなが作り、販売と材料確保がわたしの分担でした。これが出来たのは、毎月の精神的慰謝料をその費用に充てることが出来たからです。それで売り上げを全額 11 名に支払うことが出来ました。集まって作業することで日課が出来、明日が見えない暮らしの中で、一人で狭い仮設に居たら泣けるばかりだと、集まって笑って作業ができることが励みになるし元気も出る。日曜日もしたいくらいだ。夫と狭い仮設に居るのが言葉の暴力に繋がりが逃げられる場所になっているという状況もありました。売り上げから宮城県の温泉へ一泊旅行も出来ました。生まれて初めて新幹線に乗ったという人もいて、年寄りの修学旅行だと喜んでもらいました。花見、月見、クリスマス会など行事も広がり、それぞれの帰宅の付き添いや、日々の悩みの話、受診の付き添いなどメンバーの支援の範囲も広がりました。

この作業所は 2015 年 3 月にメンバーの落ち着き場所が決まり始め、隣に桑折町が復興住宅を作る際に、浪江町のこの仮設の入居者を優先するという発表があり、先が見えたところで、これからは自分の趣味として作っ

いこうと話し合い、残った資料や材料は自分たちで分けるのではなく、地元の間がいの者の作業所に貰ってもらい発展的解消をしました。

この仮設が一番落ち着いて笑顔が多い明るい仮設だと、県の保健所の指導員に言われたのは、2011 年の混乱期の中で桑折町という自治体が空き地に町として仮設を誘致し、対象を桑折町住民と浪江町にと呼びかけてくれ、その支援も浪江町が落ち着いて支援できる体制が出来るまで、町が責任を持ってくれたからです。朝夕桑折町の担当職員がお変わりないですか、お困りのことはないですかと一戸ずつ安否確認してくれました。誰かに支えられているという安心がこの仮設の住民に生まれ、早く立ち上がったという気持ちを促せたのだと思っています。

桑折町は避難者を町の準住民として扱ってくれました。町のどの施設も使うことが出来、地元の高校生は仮設の一戸ずつ表札を明るく木で作って打ち付けてくれました。町のスーパーは避難で車を失くした高齢者のために、買ったものを配達する仕組みを作ってくれました。祭りの山車のコースに仮設の通路も組み込んでくれました。ひな祭り行事の中に吊るし雛のサークルを指導員として位置づけてくれました。商工会は仮設のすぐそばの空き地にプレハブの食事所を作り、運営に仮設の料理人を選び、浪江の郷土料理をいつでも食べられるように応援してくれました。

80 歳を超えて初めて夜女子会をした、結婚して 50 年経って初めておどき残して夜家を出てしかもお酒まで呑んださあという話題も生まれました。桃の出荷時には選別の仕事や、桃農家の手伝いの仕事も地元と隔てなく自治会に声かけてもらえ、交流も進みました。この町で生きてくよと見通しが持てる暮らしを桑折町の方々から沢山もらえました。小学校でのいじめも聞きませんでした。これが子どものいない世帯にも何よりの救いでした。住民の間で他の仮設でいじめから登校できなくなった元の近所や親戚の話が伝わっていたからです。子どもが辛いということが、我がことによ

うに辛い住民感情は、子どもを地域の宝と位置づけていた暮らしがあったからです。

頼りの復興住宅は、断ると二度当たらないと言われ、決まると望まない地域であっても受けざるを得ませんでした。東京オリンピックが決まると人手も物資も東京に集中し、復興住宅の完成が遅れました。そのため希望地でなくても決まれば行かざるを得ませんでした。

桑折町の復興住宅は2年遅れて2015年夏に完成し、仮設住宅は2018年末に住民の転居に伴い閉鎖されています。

我が家は息子が2015年2月に、わたしが夏に兵庫県へ避難し退去しました。

1.3 兵庫県での生活

2014年から遅れてきた震災ストレスと診断され、不眠と高血圧で働くことが出来なくなりました。それまでの仕事はずっと福祉の現場での支援の仕事をしてきましたが、運転できなくなり退きました。不眠は今も3月が近づくとやってきます。事故当時を思い出すと感情的に不穏になる時期です。それ以外は落ち着いています。高血圧は今も定期的に受診しています。2010年までの職場の健康診断ではいつも模範的と言われてきましたから、受診を続ける日常が来るなど思ってもみなかったことです。ましてや不眠などが自分に起こるなど考えてもいませんでした。

この不眠は多分、理不尽に日常を奪われたことに納得出来ていないからです。

長らく福祉の仕事をしてきて、わたしたち夫婦は夢を持っていました。父母が地域で長らく支えてもらってきて、今度はわたしたちが地域に貢献したいと思っていました。幸い地域の社協役員が後援出来るからと言ってくれて、夫がデイケアの開設を、わたしが牧草地でアルパカの飼育をしな

ら障がい者の遊びに来れる場所つくりと、ゆくゆくは織物なども出来る作業所を夢見ていました。

浪江は障害を持った人が近隣に比べて多く、外出のガイドヘルプも多くはありませんでした。それまでガイドヘルプに出る中で、かなり臭いつばを吐きかけるアルパカがガイドする人にそのようなことはなく、一緒に外出して一番みなが臆せず近寄っていく不思議な生き物がアルパカでした。その子どもを当時200万円で飼育できる道をつかんでいました。当時はわたしの退職金でなんとか道が開かれるはずでした。その夢は潰えました。今は経済的には8万円の子ヤギを飼うことさえ逡巡し諦めることになった暮らしです。

津島の続きの暮らしをしたいと、わたしたちが出費できる田舎の空き家を探しました。条件は結婚して働き続ける娘の子どもたちを預かることが出来る距離で、原発からより遠いところでした。いくつもの場所を探し、ようやく見つけた現在の避難地は、80代の老人が、初めて受け入れた転入者という古い農村地帯です。風習も気候も言葉も全く違いますが、自治会に受け入れてもらい、避難者であることを受け止めてもらっています。地域になじめるようにと、勧められた福祉委員の仕事も3年の任期を終えたところです。

見守り担当の高齢者と日々話すことで野菜の苗の共同購入に加えていただいたり、竹藪伐採の仕事を頼まれたり、地域に馴染み、お顔と名前を覚えることもでき、野菜やおかずの交換もできるようになりました。今は手入りをできなくなった畑の管理を近くの方から声かけてもらえるようになりました。

仮設を出るとき、女子会を一緒にしていたら「男はよ仕事があれば生きてゆけんだ。女はよ友達が居なくては生きてゆけねんだ。なにたいしたことなくていんだ、家のおどさがよ、とか、今日こんなうれしいこ

とがあってよ、とか些細なことを話してよ、泣いたり笑ったりできる友達が居ねと生きていけねんだ。おめさよ、一人でここを出てゆくんぢよ。辛いことを言えるのは当たり前だけんじよ、嬉しいことをよ言えねえのが不憫でならね。」と泣きながら見送ってくれました。今はその意味を痛いほど感じています。

同じような農村地帯に暮らしても、同じ暮らしはなくなってしまったと感じています。生きがいや働き甲斐を失くしました。

隣と夕方一日の終わりを一緒に過ごす暮らし、時々一緒に遊びに出かける友達を失くしました。友人の一人は避難してからも交流して来たのに、あれだけ生き生きと生きていた人なのに、喘息と膠原病が発症し、認知症が出て今は電話してもわたしが誰か分かりません。

事故さえなければと思うことが多くあります。

福島の地域の友人で、事故があって良かった人など一人も知りません。何らかの不幸を抱えて生きている人ばかりです。

転んだ先にも花は咲き、かけがえのない人々とも知り合えました。でも、真面目に生きていればやがては知り合う暮らしがあったとも思えません。

わたしの人生が進んでいるとすれば、起こってしまった原発事故の被害者として黙ってはいないということでしょうか。

原因も追究されていない、誰も責任を取らないのですから、何の教訓も残しません。やがては同じような事故はきっと起こるでしょう。その時に、東電原発事故で地域の住民の暮らしがどうなったのか被害者として黙っていたなら、広義でわたしも加害者と同列になります。夜道で穴ぼこを見つけたのに、歩いてくる人に黙っているようなものです。だから黙らないと決めています。

14 浪江町に住めなくなり、失ったもの。

これまで話してきた、豊かな自然とそこに共にあった暮らし方、そこに暮らす素朴で心豊かな人々との関係、すべてを語らなくても分かりあえる心やすさ、地域共同体として受け継いできた農村文化すべてを失いました。

暮らしが無くなれば伝統行事は潰えます。そこで作ろうとしていたわたしたち家族の未来、生き生きと暮らしていただろう時間と満足感を得ることはできません。

未来に手渡せなくなったふるさとについて、わたしたちが下津島の暮らしに直ぐ馴染め、ずっとそこに暮らしていたように生活できたのは夫の家族が地域の中で長く暮らしてきた地域住民としての歴史があったからです。親戚は「津島のよ～」と私たちを呼んでくれました。其処にあった家の人として受け入れてもらえました。結婚した時の夫の母との約束で夏に一週間連れて帰ってくることを真面目に果たしていたので、ある程度暮らし方に馴染んでもいました。

家や土地というものが先の人への預かり物として大事に使っていくという考え方がありました。その地域の中で代々家は続き、土地や建物は預かって渡していくものでした。

地域の歴史は室町まで遡れると聞いていました。其処に戦後沢山の満州からの引き上げの人々が開拓に入って村は広がっていったと。江戸時代飢饉や冷害で村が存亡の危機に陥った時、人の移動が禁じられた時代に、布教という名目で富山から口減らしの意味も加わり女性たちを連れて僧が村を、浜通り一帯を救ったと聞いていました。その歴史が外から入ってくる人を暖かく受け入れる風土が残っていると、老人から教えられました。

住所名がそのまま屋号でした。隣り合った二軒が原東、原西と呼ばれ広く開けた場所の意でした。原野を何代にもわたって切り開き、原という場

所にし、土を作ってきたのです。真っ黒でほくほくとした土は握ると固まるけれど開くとほろりと崩れる豊かな土でした。自然に1cmの土が出来るには100年かかるそうです。どれだけの時間をかけてこの豊かな土に変えてきたのかと、それまで施設の農作業の山を切り開いた畑づくりの大変さを知っていただけに、田畑に立つときいつもこれまでの人々の努力への感慨がありました。

原発事故はその人々の長い長い努力と苦勞と、その費やされた時間をも、一瞬で無かった事にしてしまいました。どう考えても許されることはありません。企業の社会に対する責任、国の国土や国民の暮らしを守る責任からしても、この事故は許されるものではないと思っています。万が一にでも事故を起こさない危機管理があつてしかるべきです。それほど危ない発電だと国も企業も分かっていたはずですが。だからこそ原発は、事故があつた時に備えて人の少ない僻地に作られたのではありますまいか。

如何なる災害にも耐えうると2011年に入ってから東電の説明会で聞いていました。あの震災はいかなる災害の範疇ではないと許されてしまつては堪らないと、被害者として強く思います。それが許されるなら、国も電力会社も次の事故を同じ言葉でやり過ごし、また同じ苦勞をする沢山のわたしたちを生み出すのです。

15 甲状腺がんの発症

2015年2月福島市内で甲状腺の検査を受け、異常なしと診断されました。一定年齢の高い女性に甲状腺がんは多いのだから気に病むことはない。今あなたは心配いらぬとのことでした。

兵庫県に避難して支援団体による避難者健診を翌年の3月に受け、甲状腺に異常を認めると専門病院を紹介され、甲状腺穿刺で細胞検査を受けま

した。福島で子どもたちがこのような検査を受けていると思うと、惨さで泣けました。大人でも痛く怖い検査でした。

結果は放っておけない甲状腺癌だと言われ、4月まで待てないと言われ、手術を受けました。左の甲状腺とリンパ摘出でした。リンパに転移を認めるとのことでした。今はホルモン剤を服用しています。

病院では大人の女性に多いがんであり、被ばくは関係ないと言われました。わたしはたった1年で放っておけないリンパ転移のがんになるのかと疑問を持っていますが、スクリーニング場所でどれだけ被ばくしていたかの証明書はなく、被ばく量を知ることが出来ていません。10万CPM降りき切れたという記憶と、上着を袋に入れて渡されたこと、すぐ髪を洗えと言われたことだけで個人の記憶にすぎないのです。

16 避難者支援活動で体験したこと

避難者支援の一環として、2011年度内契約で福島県の非常勤職員の募集があり、福祉職として避難所の安否確認と相談の仕事につきました。ここでは身につまされる様々な話を聞き、報告していました。この時のことは守秘義務に関わることであり、また信頼してもらって聞いたことであり、避難者のむごい状況を裁判の場で、伝えることはしたくありません。それが本当の事であると証明することは個人の特定にもつながらず、公の裁判ですからご本人が知ることになれば、きっともう一度傷つくと思います

ですが、わたしの個人生活の中であればお伝え出来ます。非常勤職員の任期が終わり、独立行政法人高齢・障害求職者支援機構でジョブコーチとして就職支援の仕事に2012年度から採用されました。

そこで男性の同僚から給料もらって税金から賠償貰って左うちわだとか、賠償あるから暮らしに困らないだろ、腰かけ仕事で人と同じ給料貰うのかとか言われ、それまでの福祉職としての仕事の経験が分かるまで何か

につけて個別に言われ続けました。「仕事に遜色なく働けることを示せた時点で、「立場変わらしましょうか、賠償受け取ってください。その代わりにわたしがあなたの家をもらいます。あなたが仮設で暮らしてください。税金はこれまで働いてわたしも収めてきました。賠償とは償いの金です。それだけのことがあったということです。賠償がどれほどのものか、それを仮設で暮らして知ってもらいましょう。これから変わりますか。」と言い切ってから何も言われなくなりました。他の同僚からはよく言ったと褒めてもらえました。これは年齢を経ているので、言えたことです。

仮設に若い男性が5人ほどいました。皆仕事に出られなくなって引きこもっていきました。聞けば賠償貰っているだろう、税金泥棒とか、俺らの金で暮らしているだろうとか言われ続けて仕事に行けなくなったとか、職場の先輩たちに賠償あるだろ、それは俺らの税金だ、返せと言われて昼ご飯代を支払わせられるとか酷い所では、毎日のように居酒屋へ連れていかれて支払いさせられることが続き、収入以上の支払いに出られなくなった、あるいは支払いを拒否して嫌がらせを受け出られなくなったと。

この5人の若者の話を息子にも話していました。息子が同様の扱いを受けて、親に心配をかけると話せないでいたことを、仕事に行けなくなって初めて知りました。福島県内の状況はどこも苦しく、漠然とした被ばくの不安も人の心を荒ませていたのだと思います。弱い人へとうっぶんが向かったのでしょう。賠償というものが楽して稼ぎを手に行っているかのように思われ、それが税金であることから、まるで自分の懐から不当に持って言ったかのように扱われました。

県内に家を買った人が、その土地の同じサークルで、あなたの家ってわたしたちの税金で買ったのよねと言われ、人付き合いをできなくなったと聞きました。

いわき市内は津波被害も放射線量も高いのに避難が認められませんでした。そのため住民感情はささくれている状態で攻撃のはけ口が避難者に向かい方の激しかったところでした。でも中通りの気候になじめない人は浜通りで暮らしたいと、いわきに家を求めた人が多かったのです。元の地区総会で人々の近況が話題になりました。

いわきに家を建て3世代暮らせる家なので浪江の家より小さいけれど、いわきでは広い家、賠償でいい目してると言われ、引っ越しのあいさつに出向くと、付き合いはしないので受け取らないと玄関払い。最初受け取ってくれた人も翌日返され、自治会長から、避難者とは付き合いしないと決まったので自治会に入ってもらわないことになった。ゴミ出し場所は自治会の管理なので、出してもらわないように。子供会は自治会の管理下で、学校は子供会単位の集団登下校なので集団登校には加えられないと言いつ渡され、孫は学校で仲間外れになり、結局家を手放すことになったが、足元を見られ買うより安く手放すことになった人の話や、スーパーで賠償のある人は安売りの商品は買わなくていいだろうから売らないと言われたとか、税金払ってない人は市営施設の利用は断ると、プールも図書館も窓口で利用拒まれたと聞きました。皆親戚だったり知り合いの話ばかりでした。

そんな状況ですから、少なくない子どもたちが本当につらい目にあっていました。いじめている子どもたちは親などの大人の話聞いて、避難してきた子を成敗している気持ちであり、いじめていると実感はなくなってしまう正義感なのでしょう。知合いの孫も同じ目にあい、朝1年生が玄関で吐いて登校できなくなっていたのに、いじめを話しませんでした。兄から浪江の学校が出来ることを聞いて、その子が浪江の学校に通わせてほしいと訴えて、初めていじめを知ったと泣きながら話してくれました。震災離婚で孫を引き取ったからおらに心配かけたくないと思ってたんだべな、七

つの子が気を遣うんだよと。彼らはスクールバスで隣の市まで元気に登校するようになりました。その子ももう高校生になります。

17 放射性物質の汚染の広がり

福一から放出した放射性物質の8割が海へと流れたのは周知の事実です。残り2割の放射性物質の国土への拡散で、わたしたちは避難することになり、我が町の多くの場所が帰還困難区域となっています。2013年地区説明会でいつ還れるのかと詰め寄る住民に、国の役人は非公式ながら前置きして27年後と小さな声で答え、老人が「もうはおおらだちは生きて家さ還ることはねんだ、もうみんな一緒に暮らすことはねえ。みんな諦めて住むところ探せてことだべは」と言ったことが忘れられません。

我が家は原発から直線距離で27kmです。PAZになります。風は西から東へ吹きます。それなのに2割の放射性物質で原発から西にある地区が帰還困難区域です。

ひるがえって、今避難している近くの原発は福井の原発群です。避難地から60~80kmです。風は大陸から吹きます。その風下にある原発で事故が起こったならば、8割の放射性物質は国土へと流れます。避難地で車が黄砂で白く砂をかぶったように汚れた時、怖くて車に触れませんでした。この汚れに放射性物質がついていたらなじよすつべと反射的に思ってしまったのです。

大飯の原発から30km圏内には岐阜県の一部まで含まれます。滋賀県は、関西の水が琵琶湖は汚染されることは目に見えています。滋賀県が帰還困難区域にならないと誰が言えるのでしょうか。国は福井の原発で事故が起こっても、放射性物質は福一の千分の一だから心配はないと言います。100歩譲って仮にそうであったとしても、その8割が国土へ流れるのです。それは心配のないことなのでしょうか。

18 不十分な避難計画

わたしの避難の経験から、避難計画に示された道はいずれも福島のわたしたちと同じく山沿いの一本道です。同じ様に雪が降っていたなら避難路が避難路足りえないと走ってみて思います。冬タイヤは溝が深く、放射性物質をつけやすいでしょう。でもスクリーニングはわたしたちの経験を全く取り入れていません。それどころか軽くしてさえいます。

わたしたちの苦労は誰の役にも立たないのでしょうか。

福島事故を知っている人々は事故が起これば我先にと避難をするでしょう。逃げられない道の先が見えている国は、わたしたちにしように情報を隠すのではないかと疑います。

避難弱者の存在と結果を知っている国は、避難弱者は逃げなくて良いと、シェルターではないと認めつつ、高気密の部屋を30km圏内の施設や公民館、体育館の隅に作り始めています。3日から7日して落ち着いたら、避難弱者を助けに行くと。東電原発事故は無かった事のように。放射性物質は3日や7日で薄くなりましたか。一番放射線量が高くなったのは3月15日から27日の間でした。

2012年の春、福島県から沢山の団体で国会請願があり、わたしも友人と参加しました。地下鉄で参議院会館を目指しました。電車は3分置きに走っていました。わたしたちは1時間に数本の電車で新幹線に乗り換えて来たのに、ここでは原発事故など無かった事のように日常がある。東京に送る電力を作っていた原発が事故を起こし、日本中の原発が停まっているのに、電気は足りているではないか！わたしたちの苦労は何のためだったのか。みな黙っていたけど、同じことを思っていました。うつむいた足元に涙が落ちました。変な姿であったでしょう、一塊の中年の大人たちが駅のホームで黙ってうつむいて涙をこぼしていました。

19 福井で原発事故が起きたらどうなるか

東電原発事故は国土の右端にあり、国土に流れた放射性物質は放出量の2割だけです。しかも東北の人口は少ないのです。しかし関西の近くの原発は国土の大陸寄り、吹く風の足元です。

毎日朝TVで天気地図に書き込まれた風の矢印を予報で見ると、今原発が事故を起こしたら、避難することになると思い怖くなります。台風情報で、今九州や四国の原発が事故を起こしたら、もう逃げ先はないと思って怖くなります。

福島と違い、関西の人口はどれだけ多いことか。避難所などあるのでしょうか。東北と違って若い人や子どもたちはうんと多いのです。それを関西電力は承知しているのでしょうか。

福島の子どもたちは一身に事故の苦勞を背負って大きくなっています。甲状腺がんの数は公表されているよりはるかに多いと実感しています。発表されているのは一次検査で異常となった子供たちの中で癌になった数です。一時検査で異常のなかった子はその後甲状腺がんを発症してもカウントされない仕組みです。

なぜ多いと思うのか、それは昨年秋、道の駅で、手作りの首元の手術跡を隠すためだというチョーカーや付け襟が売られていたからです。需要があるから工夫された様々なものが売られているということ。今まで見たことがありませんでした。気を付けてみると福島市内でも売られていました。目立たない所で売られていることに買いやすいようにだと、気が付きました。

甲状腺がんの予後は良いので、5年でなく10年の生存率で見ると、手術の担当医は言いました。10年後きっとあなたは生きていますから安心してくださいと。60を超えてのわたしの10年後は生きていても死んでいてもあまり問題は無いと思われます。しかし、若い人は違います。小学生で手術

を必要とした子の10年後は青春真っただ中です。その時、大丈夫多分あなたは生きていられますと言われることの残酷さ、がん保険も入っていない若い発症は、将来的に再発した時に備えるがん保険に入れるでしょうか。

わたしの年齢での発症は既に更年期も経験し、ホルモンバランスの乱れを自分で分かって受診につなげることが出来ます。でも若い人の発症はその親がまだ更年期のホルモンバランスの乱れの辛さを知りません。子どもが甲状腺がん手術後の精神的な不安定さがあっても、それがホルモンバランスの乱れと気が付いて受診につなげられるでしょうか。ひょっとしてパーソナリティの問題として片付けられはしないか、自分の性格ではないのに扱いにくい子として周りから見られはしないか、本人のしんどさを理解されないのではないかと心配します。

若い人ほどその後の人生が長いのだと、大人は本当に気が付いてやらなければなりません。関西の子どもたちの未来が、たかが電力供給のために苦勞を背負わせることになってはならないと、自分の体験から思っています。

20 被災は公平だが、弱い人はより大きく影響を受けること

原発事故は反対していた人も賛成していた人も等しく被災しました。其処に住む人々を年齢や性別で選ぶことなく等しく災いしました。

しかし被災の影響は全く公平ではありませんでした。親戚に視力障害の人が居ました。避難を進めても、知らない場所では動けない、四六時中誰かの手助けが要る、妻に体育館の男子トイレへ連れて行ってはもらえないだろう、だから妻は避難させても自分には行かないと津島に残ったままでした。町では混乱時で障害手帳を持っていない人への救済の手はないとのことでした。止む無く視力障害者の老人施設が県に一つはあるので調べ、緊急保護を依頼しました。保護のためには様々な壁がありましたが、ワー

カーの努力で一時保護が決まり、その間に手帳の取得も出来、支援も受けられる手はずも整い自立の道が開かれましたが、癌が見つかり、あっという間に亡くなりました。

町で兄弟が重度の発達障害で避難所ではパニック障害でとても暮らせないと避難しない道を選んだ人が居ました。全員が避難して食料の調達も出来ず、停電で冷蔵庫のものは食べられなくなり、餓死寸前のところを助け出されました。

人は厄介な生き物で、困難な状況に付け込む人はいます。ボランティアと称する男たちによって幾多の性被害が出たことであつたか。そんな輩がいると分っていたなら助けられたのに、その時のわたしは全く気が付いていませんでした。支援物資を運んできたから手伝ってと、知的障害の女の子に呼びかけ車に連れ込んだのです。トイレも被害の場所でした。

先が見えない不安に、子どもは親に心配をかけないように気づかい、その寂しい気持ちに付け込む手伝いに来ているという若い男たちがいました。10代の女の子に疑似恋愛を仕掛け夜に暗闇に誘いだす。歯噛みしたいようなことを沢山聞きました。

避難所で、避難の混乱で認知症状態になった母親を、息子も夫も罵り、お漏らしを罵倒し、手を挙げ、紙おむつを勧めれば、甘やかすなど受け付けませんでした。深夜漏らして徘徊する母親を二人に気付かれないよう着替えさせ、漏らしたところを掃除するチームを作りました。こっそり紙おむつを支援し、二人から守りました。苦労や不安は皆同じなのに、男たちはより弱い女の上に胡坐をかかと思知りしました。

避難後の経済状況も貧富の差が如実に出ました。賃貸アパートの独居老人は、住まいへの賠償が無く、仕事もなく年金暮らしであったなら、失った仕事の何割かの賠償もなく精神的慰謝料のみでしたから、日々の暮らしを営むのがやっとなら、仮設住宅の期限が終わった後の生活設計は困難でし

た。

沢山の老人が一挙に中通りに避難した上に、慣れない暮らしから要支援者も増え、支援を受けられるのも難しい状況が生まれました。県の保健所から県外の支援も受けて支援チームが派遣されましたが、避難所が多く2週に一度の巡回が精いっぱいでした。

女性というだけで余分な苦労を強いられるのが避難生活です。其処に年齢や障害がさらに被害を上乗せするのです。

夫の女性への暴力も散見しました。隣の夫婦は妻が外国の人で、わたしたちが妻に話しかけるのを嫌いました。一日中家にいて妻を見張り狭く筒抜けの仮設で性衝動に抑えないと罵って肉を叩きつけるような音や体を壁に投げつける音や振動が伝わりました。何とか助けたいとカトリック教会が作った駆け込み場所の名刺を渡そうとしていました。

町の社協に連絡しても、対応するのは夫で、訪問があつた後の暴力は酷くなり、助けにならなかったのです。夫が原発へ働きに出て、その隙に彼女は逃げていきましたが、国へ戻れたのか、パスポートを夫から取り戻せたのか全く分かりませんでした。夫は避難して見つかったのが原発構内の仕事で、妻がいなくなつてからいわきの飯場へと転居していきました。

被災は誰にも平等にやってきます。でも弱い立場の人にはより重くのしかかるのだと、それまでの福祉現場と同じだと実感しています。

2.1 裁判所に対して思うこと

理不尽な被災生活だと思っています。わたし個人だけでなく避難した人の、避難できなかった人のすべての人生を変えてしまいました。

今でも津島で暮らしている夢を見ます。目が覚めてあれわたし何処にいる？と思うことがあります。今では避難生活のほうが長くなったのに。それは多分、今の暮らしが仮のものだと何処かで思っているからです。茸狩

りに行って何処にいるか分からなくて、周りから人が居なくなって日が覚めるのはたいてい3月近くなる頃です。

どうしてこんなことになったのかと、いつも思います。2010年の浪江に戻りたいかと浪江の友人たちと話しました。戻りたいけど、戻りたくないという結論でした。其処に原発がある限り、3月11日は来るから、また同じ苦勞をすと思うと怖いと。

わたしたちの不幸を関西の人々に役立ててもらえるのは裁判所だけです。いくら訴えても何も変わりません。関西電力の原発運営での不正がずっと行われ、いったん返した金がひそかに役員に戻された類末では、このような考え方で原発が動かされているのなら、安全より儲けの視点を先に行っているということ。全く遊びのない配管の数々、福一はひょっとして津波の前に地震で壊れていたのではないかと疑います。同じことが福井の原発群にあるのではないかと案じます。

木と土と瓦で出来ている京都が被災したならば、この国の歴史までも放射性物質に覆われてしまいます。だれがあのお寺の御所の瓦を一枚一枚拭いて除染するのでしょうか。

関西の人々はどんな水を飲めばよいのでしょうか。
どうか同じ不幸を背負う子どもや若い人が出ないように、人の何気ない日常が続く様に、住み慣れた町や友人と切り離されないように、ヒト以外の生き物が生き続けられるように、守ってもらえるのは裁判所の判断だけです。

どうか市井の人の暮らしを、自然を一番に考えてください。喪った物は二度と戻りません。その地の人々の長い長い時間と費やした努力までを無かった事にしないように、どうかお願い致します。

わたしたちはあの3月10日を踏み越えて、それまでと全く違う人生を、全く違う場所で生きています。でも関西の方々は2011年3月10日に続く今日を生きておいでです。どうかその幸せを守ってください。

2020年 8月18日

住所:

氏名:

常里 千代子 印